

# いもち病（葉いもち）情報第1号

平成29年6月15日  
愛知県農業総合試験場  
環境基盤研究部病害虫防除室

東海地方は6月7日頃梅雨入りしました（平年6月8日頃、昨年6月4日頃）。本日、名古屋气象台発表の週間天気予報によれば、向こう一週間は、期間前半は高気圧に覆われて晴れる日が多いですが、期間の後半は前線や低気圧の影響で曇りや雨の日が多いと予想されています。

イネいもち病発生予察用シミュレーションプログラム（BLASTAM（裏面参照））を用いた葉いもち感染好適日の判定によれば、大府で6月8日に好適日となりました（表）。

水分や温度などの条件が整うと、被害稲わら等でいもち病菌の孢子が形成され、風雨で飛散します。いもち病菌の孢子がイネ葉上に付着すれば、感染好適条件が満たされた日から7日前後で病斑が形成され、10日から2週間で目立つようになります。本田を見回り初発生を確認したら、適切に防除しましょう。

なお、補植用苗はいもち病の伝染源となるので、早めに除去しましょう。

表 BLASTAMによるいもち病（葉いもち）感染好適日の推定結果  
（6月1日～6月14日）

日付	尾張				西三河		東三河			中山間	
	愛西	名古屋	大府	南知多	豊田	岡崎	蒲郡	伊良湖	豊橋	新城	稲武
6/1	—	—	5	—	5	5	3	—	1	7	2
6/2	4	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—
6/3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6/5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6/6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6/7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6/8	①	④	●	9	①	①	①	④	①	①	①
6/9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	①
6/10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6/11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6/12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6/13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6/14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

●：好適条件（湿潤時間が長く気温も適当で、いもち病発生の好適条件が現れた）

④：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤時間中の平均気温が比較的低温、その平均気温に必要な湿潤時間より短い）

③：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤時間中の平均気温が15℃～25℃の範囲外）

②：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が25℃以上）

①：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が20℃未満）

数値：湿潤時間が10時間未満の場合の湿潤時間数

—：好適条件なし（いもち病発生の好適条件が現れなかった）

# BLASTAMについて

BLASTAM（イネいもち病発生予察用シミュレーションプログラム）は、アメダス観測地点における、気温及び降水量等から葉いもちの感染好適条件を推定するシステムで、下図の流れで感染好適条件を判断しています。

## 1 BLASTAMによる葉いもち感染好適日の判定結果の見方

この表で●印のついている日は、いもち病の感染に好適な条件が現れ感染の可能性が高いことを示しています。①、②、③、④印はいもち病の感染に気温条件がやや不適ですが、感染の可能性が比較的高い日であることを示しています。印のついていない日は感染の可能性が低いか、全くない日であることを示しています。

このような印が同じ日に県下の多数の地点、あるいは地域にまとまってつくと、県下全域、あるいはその地域で、広範囲にいもち病の感染が起こる可能性が高い日であったと判定されます。

## 2 感染好適条件と発病

感染好適条件が現れた（●、①、②、③、④印が現れる）日から7日前後で初発生が予想されます。初発生後極端な低温か高温がない限り、感染好適条件が現れた日から2週間前後で病斑が目立つようになります。その前後に次の感染好適条件が現れると2次感染が起こり、葉いもちが蔓延し始めます。

いもち病の感染に好適な条件が現れ、感染が起こってもイネの品種、肥培管理、防除等によっては発病に至らない場合もあります。

また、発生量についてもほ場内の進行型病斑の割合、イネの品種、肥培管理、防除と気象条件に左右されますので、感染に好適な条件が頻繁に現れても、必ずしもその地域のすべてのほ場でいもち病が蔓延するとは限りません。

したがって、この情報を参考にしながら、発病を認めたら速やかに防除を徹底することが大切です。

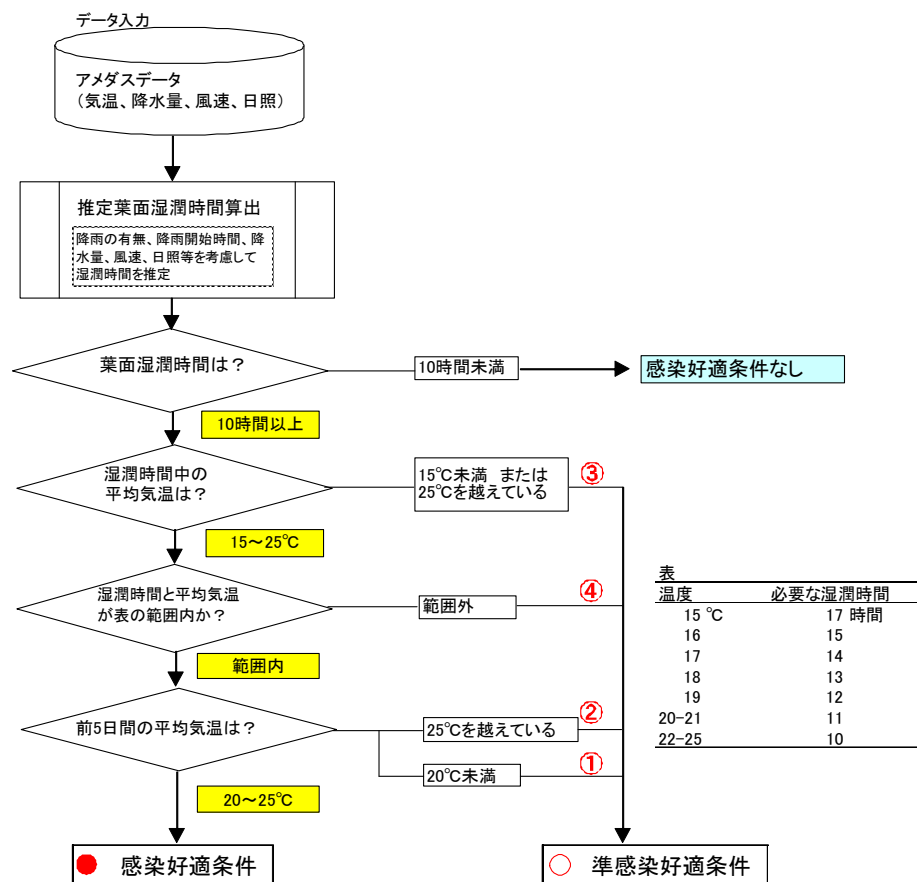


図 BLASTAMによるいもち病（葉いもち）感染好適日判定の流れ